外国語活動部会

＜県研究主題＞
コミュニケーション能力の素地を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　浦木　ひとみ（湘南三浦地区）

＜研究主題＞
「伝えてみたい」「聞いてみたい」心をくすぐるコミュニケーション活動の授業づくり

１　提案内容

（１）実践に向けての課題意識

「英語で話したり聞いたりしたい」という前向きな思いがありながら、失敗を恐れ不安から自信がもてず、友達と関わることに消極的な児童が、自信をもって自分の思いを表現できるよう「伝えてみたい」、「聞いてみたい」と思える場や教材を工夫し、外国語に慣れ親しむ指導過程を重視した授業づくりに取り組んだ。

（２）年間指導計画の工夫・改善

「教師も児童も無理なく」を基本の考えとし、“Hi,friends!”を主教材として学習していくこととした。また、“Hi,friends!”の年間指導計画案を参考にしながら、指導計画を作成した。その際、話すことを楽しむ活動、体験的な活動、必然性や意味をもたせた活動を設定することを重視し、児童の実態に合わせて１単元の時間数を工夫した。

（３）実践上の工夫

①外国語活動が楽しくなるような環境づくりをする。

・多目的室の設置…CD プレーヤーの設置、教材の保管、グループ活動やアクティビティに応じて児童が移動しやすい机や椅子の配置

・掲示物の工夫…歌詞カードやフラッシュカードなどを児童の目に触れるように掲示

・電子黒板の活用…デジタル教材等、視覚や聴覚で得られる情報の有効活用

②児童が無理なく学習に取り組める工夫をする。

・学習形態の工夫…「ペア→少人数→クラス全体」というスモールステップ

・単語や表現の学習方法…繰り返し学習で慣れ親しむ
担任だからこそできる外国語活動を意識しゲームをアレンジ

・友達と関わることが楽しくなるような活動の設定…ゲーム性のあるインタビュー活動

・ワークシートやインタビュー方法の工夫…より多くの友達と関われるように

③振り返りカードの活用…本時の目標を具体的に書いた自由感想の欄が有効

（４）実践の成果（○）と課題（●）

○他教員や FLT(Foreign Language Teacher)と連携して、多目的室の整備等の環境づくりをしたことにより、児童が自然に外国語を学ぼうとする前向きな気持ちを育てることができた。

○「ペア学習→少人数グループ学習→全体学習」のように学習形態を工夫したことや、スモールステップで繰り返し単語や表現を練習したことにより、自信をもって進んで発表する児童が増え、児童同士のコミュニケーションも活発になっていった。

○学級担任が指導することで児童の実態に応じたアクティビティを取り入れることができ、児童は楽しく自然に活動に参加することができた。

●児童の学習意欲につながる、授業毎、単元毎のまとめの持ち方

●児童の自己評価だけでなく、他者評価を取り入れるなど評価方法や内容の工夫・改善

2　協議内容

（1）　Q:環境づくりは一人ではできない。ここまでの経緯や大変だったことを教えてほしい。

A：学年ブロックでの協力、視聴覚担当への協力依頼。「外国語活動以外にも活用できる部屋に」ということで協力を得た。

（2）　Q：振り返りカードが具体的でよかった。他者評価についてもう少し聞きたい。

A：自分ではまだ実践できていない。実践している人の話では、５時間扱いの単元では４時間目に他者評価を取り入れることで、「こういうところがよくなってきた」「次はこうするといい」など、自分では気づけない評価が友達から得られている。

（3）評価は通知表との関連から３観点に沿って行っている。感想が具体的になるように書くパターンを例示した。授業の最後によく書けている感想を紹介し、共有している。

（4）児童が達成感をもつことが評価で大切なのではないか。「すごいじゃん」など、教師の声かけが次への意欲につながる。（形成的評価）

3　協議の柱に即したグループ協議

外国語活動の学習意欲を高める指導のあり方

・環境を整備することで授業に取り組みやすくなる。
・年間計画の弾力的な運用、毎年見直すことが大切。
・“Hi,friends!”をそのまま使うのではなく、子どもの実態に合わせて使う。
・様々な学習形態を取り入れる。
・チャンツを活用することで雰囲気や意欲も高まり、積み重ねにより単語等も身に付く。
・アクティビティが充実しているとよい。子どもの意欲の変化を見て考えることが大事。
・１年生から外国語活動をやっていると、高学年では恥ずかしさもあり、のってこない。必然的に考える場面を作ること、知的好奇心をかき立てる工夫が大切。
・教師が意欲をもたないと子どもの意欲は引き出せない。
・英語を使ってコミュニケーションできたという経験が大事。
・△の自己評価の子を次の時間に意図的に褒めたり、休み時間等にフォローしたりする。
・研修等で得たことを学校全体に広げていくことが大切。

4　助言

（1）　実践でよかった点は、①子どもの実態に応じた指導内容、指導計画の作成、②スモールステップなどの学習形態の工夫、③振り返りカードの工夫、改善である。

（2）　コミュニケーションの素地とは特別なものではなく、態度を育てていくこと。根底にあるのは、相手のことを知りたい、相手を受け入れよう、自分のことを知ってもらいたいという思いである。心を育てるには、心を動かす体験をしていくことが大事。

（3）　指導と評価の一体化と言われるが、まず指導のねらいがしっかりしていないとだめ。そして、明確に児童に伝えることが大切である。相手に伝わるように伝えるとはどういうことか。「アイコンタクトをとって」「反応しながら」など、はっきり伝え、意識させることが大事である。教師の褒め言葉、コメントで意識づけすることもできる。

（4）　外国語活動だからこそできること（日本語だと照れくさいことも外国語だったら言える、友達のことを改めて知るなど）がある。外国語活動を通して、よりよい学級経営をしていってほしい。

提案２　　提案者　豊竹　美喜子（川崎地区）

＜研究主題＞
外国語活動・英語を軸にした小中連携

１　提案内容

（１）主題設定について

小学校の授業内容や実態、児童の特性を知ることが中学校での豊かな教育活動につながると考え、外国語活動・英語科を軸とした小中連携の年間指導計画を作成し実践した。

（２）小中連携の具体的な取り組み

①小学校の取り組み

「外国語活動担当教員」を中心に中学校との連携を進めている。担当の主な役割は、（ⅰ）中学校英語科教員が週に１回小学校の授業に入れるよう学年間の時間割を調整、（ⅱ）中学校英語科教員を講師とした研修の運営、（ⅲ）担任が授業を進めやすくするための教材や指導案の整理・保管などである。

②中学校の取り組み

英語科教員２名が小学校高学年の授業へ週に１回ずつ入っている。具体的には、（ⅰ）直接的な授業支援、（ⅱ）授業後に改善点をアドバイス、（ⅲ）中学校で取り組んでいるチャンツ活動を小学生向けにアレンジした教材を使った授業支援や教材面でのサポートもしている。

③小中連携の授業形態の工夫

小学校教員（T1)が活動の主な流れを考え、１単位時間の学習をリードする。中学校教員（T2）は，主に授業導入時のチャンツ活動を担当している。学級担任と専科の特性を生かした形態である。

（３）成果と課題

＜成果＞

教育活動全体に関わる成果として、児童が中学校教員と触れ合う機会が増加した。外国語活動への意欲の向上や中学校の学習への不安が軽減されてきている。教員間の児童・生徒理解も図られ、情報の共有も広まりを見せている。小中で同じ子どもを見守っていくという意識が生まれてきた。

＜課題（今後の展望）＞

全ての教員が、安心して外国語活動を教えられるためにも校内研修を積み重ねることが必要である。教員間だけではなく、児童・生徒同士が外国語活動・英語を通して直接コミュニケーションできるような場を設定していく。

２　質疑応答・協議

Ｑ：中学校英語科教員と授業内容について、どういう方法で打ち合わせを行っていたのか。

Ａ：４月に指導計画を小学校高学年教員及び中学校英語科教員に配布し、活動内容を共有している。外国語活動の授業前に担任が中学校教員と打ち合わせを行えるよう、音楽などの専科を前時に入れ対応している。また、給食の時間、学年会など短い時間を効果的に使って

いる。

Ｑ：年間指導計画は整っていると思う。今後、授業づくりや評価といった内容面においてどういった連携を考えているのか。

Ａ：現在の年間指導計画を大きく変える予定はない。内容面では、中学生が小学生に英語で教えられるような授業を行えないかアイディアを練っているところである。

（補足：横須賀市の実践より）

中学生が小学生に教えに行く活動は意欲的に取り組もうとする。しかし、生徒が直接教えに行くには、授業時数の調整が難しい。

３　助言

（１）小中連携のツールとしてチャンツ活動には可能性がある。

短い時間で取り組めるチャンツ活動は、小中５年間の学びの連続性を保つのによいツールである。

（２）AET を小中連携のキーパーソンにする。

外国語活動担当の他に、小中を行き来する ALT にも動いてもらうことで連携の幅を広げることはできないのだろうか。

（３）今、各校でできることを考え、実践していく。

一教員の立場として小中連携を推進するのは難しい面がある。そこで、まずは中学校へ外国語活動の取り組みを発信し、活動内容を知ってもらうことが必要なのではないか。お互い知らない部分を共有するところから始めてみではどうか。課題はあるものの、児童・生徒が外国語活動・英語を通して直接交流できるような場を設けていってほしい。今日の提案を聞き小中連携の理想と現実のズレを知り、今できることから始めていく姿勢が必要ではないだろうか。

４　まとめ（県教育委員会指導主事）

（１）外国語活動でめざす子どもの姿

友達との関わりを大切にしながら学んでいく中で、あいまいさに耐え、間違うことをおそれない心を育てていってほしい。教員はチャレンジしたことを積極的に誉めていってほしい。

（２）学習指導要領の３つの柱を意識した授業づくり

指導計画や指導内容が必要以上に細部にわたったり形式的になったりしないようにすることが肝心である。形式的な活動を 100 回繰り返して終わるのではなく、１回でも「情動」が伴う活動を設計しておくことが必要である。必然性のある場面設定や、コミュニケーションをとれるような活動の工夫が子どもの知的好奇心を高める。

（３）小中連携の見通し

一気に連携は進んでいかないので、スモールステップで取り組んでいってほしい。多くの中学校の先生が外国語活動を経験した子どもについて「今までと違う」ことを実感している。しかし、「書くこと」「読むこと」の指導面では苦労している現状である。なめらかな小中の接続に向けて、系統立てた文字の「扱い」を指導計画に取り入れることも必要になっている。各校の実態に合わせて検討をしてほしい。